

# 現代短歌・俳句に見る新語オノマトペ

## ——既存のオノマトペからの派生をとりあげて——

大野 純子

### 1. はじめに

「オノマトペ (フランス語 onomatopée)」とは擬音語・擬態語の総称である。日本語は世界の言語の中で比較的豊かなオノマトペの体系を持つ。しかし言語研究における対象としては、従来あまりとりあげられてこなかった。その原因は、オノマトペは幼稚なものであるという先入観にある。近年はオノマトペ辞典も相次いで出版され、認知言語学、音声学、音声工学、または心理学からの分析も増えつつある。

日本語は事物の形容、副詞の語彙が豊富ではなく、その分をオノマトペに頼ることが多い。「思わずうとうとしたので、まだ頭がぼんやりしている」「のっぺりとした顔で着物をぞろりと着こなす」の下線部分を、オノマトペを用いないで表現しようとしたら、かなり長くなってしまっただろう。

オノマトペは感覚的に理解できる部分があるため、語彙の中では創作しやすいものである。文学作品のジャンルで言えば、短歌・俳句（以下、「短詩」と記述する）とマンガに、その例が多く見られる。個人的に創作されたオノマトペを本稿では「新語オノマトペ」と呼ぶ。大野（2005）は現代の短詩の中から作者のオリジナルと見られる新語オノマトペ、たとえば「（鯉節を）けこけことかく」「蝶がぶとぶとと飛ぶ」などのような作者のオリジナリティが高いものをとりあげた。大野（2007）は、あるマンガの新語オノマトペを扱った。本稿は、短詩の新語オノマトペの中でオリジナル性が低い、既存のオノマトペからの派生語を扱う。

短詩の実作者が作品中で独自のオノマトペを創造し、使用する時、その目的はどこにあるのか。短詩に限らず、オノマトペは文の中で目立ち、注目されやすい。それが新語オノマトペであれば、さらに注目度も高まる。短詩は拍数の制限が厳しいので、「（水が）こぼこぼ（と湧き出している）」と言わずに「（水が）くぼくぼ（と湧き出している）」と言った時、作者はその造語の形態、音声、意味などに細心の注意をはらっているはずだ。

オノマトペに限らず、「新語」はそれを見聞きした他者に、確実に作者の託したイメージを伝えていることが望ましい。本稿で採りあげた新語オノマトペは直接筆者が個人の歌集・句集から抜き出したものではなく、いずれもまず選者によって選ばれ一冊の本になったものから、さらに筆者が選んだものである。つまり、「選者」というフィルターを一度通すことで、この新語オノマトペが個人的な使用に終わらず、その意図を他者に確実に伝達していることを保証している。

本稿で扱う「派生オノマトペ」は、以下のように整理できる。

- ・音声面での派生（清音・濁音等の交換等）

- ・形態面での派生（添加、省略、繰り返しなど）
- ・意味面での派生（交差感覚〔クロス・モーダル〕の利用）
- ・品詞面での派生（異なる品詞への取り込み）

以下にそれぞれ例をあげ、説明を加える。

## 2. 音声面での派生

### 2.1 清音・半濁音・濁音を交換したもの

短詩はもともと朗詠するものであった。現在では朗詠よりも、むしろ文字表記によって短詩を鑑賞することが多くなったが、歌いあげた時の全体の音の印象を考える伝統的な習慣は残っているはずである。

例として、北原白秋の有名な一首をあげる。

君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

は、「さくさく」という清涼な印象を与えるオノマトペが雪を踏む音だけでなく、りんごを食べる時の音まで連想させ、評価されている。もしこれが「ざくざく」であれば、子どもの雪遊びのようになってしまっただろう。

短詩を材料にして日本語の分析をするにあたっては、表記面での旧仮名遣いと発音面での「読み」の異同についても考慮しなくてはならない。短詩は現在においても旧仮名遣いを用いることが少なくない。戦後、学校教育において旧仮名遣いが使用されなくなり、現在の短詩の作者は創作のために、わざわざ旧仮名遣いを学んで使用している。なぜ、その努力が続けられているのか、その理由はいくつかある<sup>1)</sup>が、オノマトペとの関係で述べれば、旧仮名遣いが身近でない世代にとって新鮮さを与えることがある点もあげられよう。また、濁音の響きが汚いことを嫌い、字面を汚さないために濁点を用いていないことも考えられる。作者によってはその読みを限定せず、現代仮名遣いで読んでも旧仮名遣いで読んでもよいと、読者に任せている場合も多い。そのため当該箇所がオノマトペの派生とも、そうでないともとれる場合がある。ここではいちおう前者を原則とし、音の交替が行われたものとして以下にとりあげた。

オノマトペの意味はもとより、その音のイメージを重要視する短詩の作者が、既存のオノマトペにあきならず、清音・半濁音・濁音の交換をした場合、表現したい対象にイメージを合わせたのであろうと想像される。以下の例1～6の下線部はすべて既存のオノマトペの濁音を、半濁音化、または清音化したものである。そのうち1～4にみるように、「A B A B」（例：ころころ）のオノマトペであればAの部分を変換することが多い。5は「A B リ」の型で、これも語頭音を変化させている。6のようにBの部分を変化させている例は少ない。

（各々、下の行に既存のオノマトペを示した。）

1 わが意志に今は従う左右の足のぼしちぢめてこしこし洗ふ

（安田純生）

←ごしごし



となり、全種類がそろってしまう。歴史的な発音の変遷、文字表記の変遷、そしてここに短詩特有の習慣（旧仮名遣いを用いること、音・字面を汚さないために濁点を避ける場合があることなど）が加わり、複雑な様相を呈している。結果として、オノマトペのハ行子音には古来の「パ対バ」の対立と、新しい「ハ対バ」の対立が併存し、その他にも何らかのルールがあると言えよう。元来、オノマトペはこのハ・パ・バ行音で始まるものが非常に多い。この点からもオノマトペの持つ表現力の豊かさが感じられる。

6のオノマトペ「しばしば」は語頭音ではなく、第2音を変えた例である。オリジナルと考えられる「しばしば」はここでは回数の多さを言うのではなく、しきりにまばたきをする様子を表す。「バ→パ」の交替で程度が軽くなっているため、古来の「パ行対バ行」の対立である。

## 2.2 音位転換

7 夕闇の路の面がたびたびと我が足裏に呼応せりけり (佐藤通雅)

←びたびた

ここでの「たびたび」のオリジナルと思われる既存のオノマトペは「びたびた」で、「び(っ)たり」「びたっ」のバリエーションも持つ安定したオノマトペである。

上記「たびたび」は語頭と語中の音を逆転させ、sonority（音の聞こえ度）が高い母音アを持つ「た」の音を語頭に置き、強調している。第2音「び」の子音 / p / は両唇音だが、狭母音 / i / に影響され、硬口蓋化されるので、広母音を持つ「た」より多少鋭さが減る。

「たびたび」は日本語母語話者にとって、どちらかというと言音しにくい音連続である。 / (C) a i / という母音連続は「貝」「舞」「灰」のように古くから日本語に存在し、語によっては母音融合<sup>3)</sup>さえ起こすほど違和感のないものなので問題はないが、「たびたび」は子音の中では比較的新しく日本に入った / p / 音が / i / の前に入ることによって、発音するのに努力を要するようになった。見方を変えれば、平凡な「びたびた」は音位転換をすることによって、これだけ印象的なオノマトペに変身したのである。

## 3. 形態面での派生

### 3.1 既存のオノマトペを一部変化させたもの

#### 3.1.1 長音・促音・撥音を添加、または省略したもの

オノマトペには元々特殊音がよく使われるので、これらを利用した派生形は多い。

四 8 わがうちをぎらありぎらりと光りつつ人まろがゆき家持がすぐ (岡井隆)

←ぎらりぎらり

9 うむうむうむと孟宗竹の子が伸びる鬱から皮のむけてゆくなり (渡辺松男)

←うむうむ、うんうん

10 割るよりも裂くは快感朝の窓ひらけばぺらんと夏の空あり (栗木京子)

←ぺらっ、ぺらぺら

11 この世界の崩さるる日のいつか来るや独り居れば今日の雲ぐぐと湧く (安立スハル)  
←ぐんぐん

12 晩秋の天の高さがぐぐぐぐと降りきてついに曇り深かり (松平盟子)  
←ぐんぐんぐんぐん

8は実質的には長音の添加、9は促音の添加である。長音のない所に長音を置くと、強調の働きの生じる。自然発話では長音は長さの点で不安定だとも言えるが、短詩の場合、拍数が常に意識されるので、かえって長音にはっきりした1拍分を与えることができ、確実に強調の役目を果たすことができる。ただし、長音はもともと終結の時点をはっきりさせる機能は持たないので、ここでは「ぎらぎら」→「ぎらあぎらあ／ぎらーぎらー」とはならず、前半、後半両方の「ぎら」に「ぎらありぎらあり」と完結を表す「り」を添加している。(この「り」については3.1.3で述べる。)

9は促音の添加の例である。促音は日本語の発音の中では外来のものであり、表記も時代の変遷に伴い、変わってきた。促音は長音と同様、単独では発音できない点もあり、同じように不安定さがつきまとうが、これも先ほどの8の例と同様に1拍分を完全に与えることによって、その役割が揺るぎないものになっている。オノマトペ中の促音は完結を表すことができ、「うむっ (ウンッ)」を一回の行為として数えることができる。

10の短詩は拍数を見ると、ワルヨリモ・サクワカイカン・アサノマド・ヒラケバペラント・ナツノソラアリ「5・7・5・8・7」で下二句めが、定型「5・7・5・7・7」を破っており、そこはオノマトペ「べらん」のある箇所だ。ただし、この破調は特殊音以外によって起きた破調と異なり、あまり目立たない。なぜなら撥音、促音、長音は自立性が低いからである。短詩の実作者であれば誰でも心得ているように、これらの特殊音は定型の拍数を満たすのに必要であれば1拍として数えることができ、また、都合が悪ければ数えないで済ませることもできる便利な音なのである。上記8「ぎらありぎらりと」(定型7拍の所、8拍)、9「うむっうむっと」(定型5拍の所、7拍)はそのために破調が目立たない。

窪菌(2005 p.156-163)による日本古来の唱歌と音符との関係の考察からも、特殊モーラ<sup>4)</sup>が不安定であることがわかる。唱歌などは一音節に一音符が基本であるが、特殊音はしばしばその原則を破り、自立した拍とは異なる音符との対応を見せているという。

10の「べらん」の「ん」もそのようにして、意味的な存在がありながら、拍数については存在感があまりないという、複雑な性格を持つ。オノマトペ語尾の「ん」は主に強調の役割をするが、強調するということはその様子の独立性を認めさせることになる。つまり、「ヒラケバペラント ナツノソラアリ」であれば「七・五」の拍数は満たしているものの、作者はもう少しここに「夏の空」の存在感を出したかったのだととれる。

次の11、12は反対に、従来「ん」があるものを取り去った例である。「ぐぐ」、12「ぐぐぐぐ」は共に「ぐんぐん」よりスピード感・臨場感を感じさせる。

### 3.1.2 一部を繰り返したもの

- 13 自動車がずんと過ぎ後の路地犬も雀も素足に歩む (高野公彦)

←ずん

これは「ずん」の語頭音を繰り返したともとれるし、また「ずんずん」の一部を省略したともとれる。拍数のことを考慮すると「ずんと過ぎし」では6音しかない。「ずんずん過ぎし」は7音でよいのだが、最初の「ん」をとり、代わりに引用の「と」を入れることによってスピード感を表している。このように特殊音は、かなり自由に添加したり省略したりできる存在である。

### 3.1.3 「り」「こ」を添加したもの

- 14 先頭にプラカード持つ女生徒の太ももきびりきびりとあがる (俵万智)

←きびきび

- 15 寒雷やビリリビリリと真夜の玻璃 (加藤秋邨)

←ビリビリ

- 16 プールには四角い水がゆたゆたり変形願望たたえつつ青 (松平盟子)

←ゆたゆた

- 17 ひやらりこと鳴きたる笛か川はいま甲斐の寂しき幅ひからする (今野寿美)

←ひやらり

14の「きびりきびり」は「きびきび」とどう違うか、つまり、「り」の添加によりどのような意味が生じているのだろうか。3.1.1でも「り」の機能について取りあげたが、もう少しくわしく見てみたい。

田守(1993 p.74)は「日本語オノマトベに見られる『り』語尾は『ゆったりした感じ』ないし『完了』を表すと推測される」と述べている。

このように考えると、「きびきびと働く」「きびきびと足をあげる」は両方言えるが、\*「きびりきびりと働く」とは言えないこと、また同じように「にこりと笑う」は言えるが、\*「にこりと笑い続ける」とは言えないことの説明が可能になる。「働く」という動作はその行為がある程度以上の時間にわたって行われることを前提としている。「足を上げる」ことが、瞬間的とは言わないまでも、「働く」と比べてその必要最小限の時間の長さは違う。14「きびりきびり」の「り」は太ももを上げ、そして下ろすという一回ごとの動作の完結を表している。

15の「びりりびりり」は14とは異なり、「びりりりする」のが続くことを表す。既存のオノマトベには「ひりり」などがある。このように「り」を添加すると比較的短時間の動作を表す時には合わなくなる。たとえば、「(歯でせんべいを)パリッ/カリッと割る」が一回分の動作とすると、「バリバリ/カリカリ(と)割る」「バリリバリリ/カリリカリリと割る」の順に時間、回数も増える。

16の「ゆたゆた」は名詞で終わっている結句の代わりに述部の役をしている。拍の関係から言えば、「ゆたゆたと」でもよいわけだが、歌に緊張感がなくなる。ここでの「り」は文語ならではの意味用法が仮借可能である。つまり、形態の上で文語の述語動詞(「あり」「たり」など)ととれるのである。

17の「ひやり」は笛の音として古来使われている表現である。「こ」をつける例は他に「どんぶらこっこ」がある。

### 3.2 既存のオノマトペを結合させたもの（複合オノマトペ）

以下にあげるものは、既存のオノマトペの組み合わせである。ここでは、複数のオノマトペの掲出順について考察したい。

- |    |  |         |
|----|--|---------|
| 18 | 雪の水車 <u>ごつとんことり</u> もう止むか              | (大野林火)  |
| 19 | 君は信じる <u>ぎんぎんぎらぎら</u> 人間の原点はかがやくという噂を  | (佐々木幸綱) |
| 20 | 君を打ち子を打ち灼けるごとき掌よ <u>ざんざんばらん</u> と髪とき眠る | (河野裕子)  |
| 21 | <u>ばらりずん</u> と恋い失ひし四月馬鹿                | (黒崎和子)  |
| 22 | <u>がぼごぼ</u> と泉湧きをり通り雨                  | (矢田常次郎) |
| 23 | 檜の木の梢に風が生まれるか <u>ざわざわずわん</u> と高鳴りがして   | (沖ななも)  |
| 24 | わが胸の鼓のひびき <u>とうたたりとうとうたたり</u> 酔へば楽しき   | (吉井勇)   |

18の「ごつとんことり」は明らかにこの順でなければならない。逆の順番「ことりごつとん」は一度止まって再度、動き出すことになる。

19の「ぎんぎんぎらぎら」は新語と言っても、すでに童謡もあり<sup>5)</sup>、読み手のほうにこの順番の刷り込みがなされている。ただし、「ぎんぎん」は派手に目立つさま<sup>6)</sup>、「ぎらぎら」は異様に輝くさまを表しているので、どちらが先でもよいはずだ。前者の「ぎんぎん」を「ぎらぎら」の語頭音「ぎ」から作ったことば遊び（例：「つんつん月夜」「てんてん手まり」）と考えることもできる。

20の「ざんざんばらん」は「ざんばら」という語から連想すると、やはりこの順番が落ち着く。

21の「ばらりずん」は、恋を失ったとわかった時点で何かが「ばらり」とほどけ、自分の手の中から「ずん」と下に落ちていったという時間的順序に従っている。

22の「がぼごぼ」はA B C Bと表記できる。このパターンは意外に数がある。日向・笹目（1999）はオノマトペ辞典の項目としてあげられているオノマトペ1,648語の形態を分類している（資料「語形から見た擬音語・擬態語の分類」）。以下、この表を「日向・笹目表」と記述する。この資料には、A B C Bの例が22例（全体の1.3%）あげられている。「あたふた、うろちよろ、ぎくしゃく」などである。「がぼごぼ」は短詞の内容から「がぼがぼ」「ごぼごぼ」の複合語であると思えるが、A B C Bタイプがすべてそうとは限らない。この順番に関しては「がぼごぼ」でも、「ごぼがぼ」でもさしつかえない。

23の「ざわざわずわん」はやはり時の順を追っている。葉が風で「ざわざわ」し、その高まりが「ずわん」というオノマトペで表されている。24「とうたたり / とうとうたたり」は五七のリズムにのせるために「とう」の部分を繰り返したのかも知れない。

以上の観察によると、複合オノマトペは時間的順序があれば、それによって配列し、また、五拍・七拍の定型に合うように形態を整える必要もあることがわかる。

#### 4. 意味面での派生 — クロス・モーダル

触覚、味覚、臭覚、視覚、聴覚によって感じることを、その分野以外の形容に用いることをクロス・モーダル（交差感覚）という。たとえば声について述べる時、「小さな声」「かすれた声」などは聴覚による形容で従来のものだが、「甘い声」「冷たい声」「明るい声」などはそれぞれ「味覚」「触覚」「視覚」を表す形容表現を利用したクロス・モーダルによるものである。

オノマトペでも同様に、ある感覚表現を他の感覚に転移させて表現することが可能である。以下にその例をあげる。これらのオノマトペは動詞・形容詞、または形容の対象となるものとの従来の共起を破っているという共通点があるので、その視点から分類をした。

##### 4.1 従来、使われる対象以外を持ってきたもの

（見出し矢印の左側は、そのオノマトペが従来共起する動詞の例、矢印の右側はこの短詩で共起している動詞を表す。）

- ちりちりと縮れる、焦げる → ～と飛ぶ
- 25 しじみ蝶ちりちりと飛び地に低しもとより汝もうたかたのもの (蔭田さくら子)
- ひりひりとする、～と痛む → ～と匂う
- 26 ひりひりと石の匂ふや実朝忌 (栗島弘)
- ぎくしゃくとする、～と回る → ～と降る
- 27 ぎくしゃくと雨は降るなり白袈裟の若法師らが縦列に来る (河野裕子)
- きしきしときしむ → ～とゆるめる
- 28 きしきしと牡丹苔をゆるめつつ (山口青邨)
- ぎくぎくとする → ～と書く
- 29 ぎくぎくと子が書き終へし履歴書の余白の多さ若いなり二十一 (河野裕子)
- ぴしと当たる → ～と凍る
- 30 みちのくの林檎歯に当つくれなるの一つぴしと雪凍る音 (馬場あき子)
- (胸が) きゅんとする → ～と泣く
- 31 そのままを告げよとならば声あげてきゅんと泣きたき思ひと言はむ (大西民子)
- たらりと下がる、たれる → ～と眠る
- 32 電車にてたらりと眠りいる女鼻の頭が光っておるよ (阿木津英)
- 八 ぴらぴらとする → と鳴く
- 33 ひばりひばりぴらぴらと鳴いてかけのぼる青空の段直立らしき (佐々木幸綱)
- かんと鳴る、～と音がする → ～と (?何も聞こえない様子)
- 34 青天はかんと冬なる遠さ置き人は心に天秤を置く (今野寿美)
- 紙、布をくしゃくしゃにする → 水を～にする
- 35 大根を水くしゃくしゃにして洗ふ (高浜虚子)



- さんさんと照る → ～と蹴る
- 36 君は蹴る父の扉をさんさんと蹴れば新鮮な肉の傷みよ (佐々木幸綱)  
しんしんと (夜が) 更ける → ～と碧い
- 37 しんしんと肺碧きまで海の旅 (篠原鳳作)  
こつんとあたる → ～と来る
- 38 しろい昼しろい手紙がこつんと来ぬ (藤木清子)  
うすうすとわかる → ～逝く
- 39 牡蠣くうやその夜うすうすと人逝けり (赤尾兜子)  
とくとくと流れる → ～匂う
- 40 十五夜の醤油とくとくと匂ひけり (岡本眸)

以上の例の中には、短詩の定型に合わせるために、オノマトペと従来共起すべきであった動詞・形容詞を省略したととれるものもある。しかし、いずれにせよ、定型の中での修飾関係がはっきりしていなければ鑑賞の対象になり得ない。

#### 4.2 擬人化

4.1 で見たのは修飾の共起を破る例であった。この「擬人化」も同様の例だが、有生名詞、無生名詞についての分類を設けたかったので、ここに置いた。

- 41 連翹に空のはきはきしてきたる (後藤比奈夫)
- 42 墓碑を売る石材店に差す日射しあっけらかんとして暖かし (千々和久幸)

41 で、「A B ッリ」型「はつきり」は「天氣がはつきりする」「はつきりしない人」という既存の修飾関係がある。一方、同じ語基を持つ「A B A B」型「はきはき (する)」はふつうは人を動作主として話すさまを述べる。「空がはきはきしてくる」または「はきはきしない天氣」は擬人化である。

次の42「日差しがあっけらかんと射している」は、41 よりも「無生の物があっけらかんとしている」様子を見ている有生の物としての作者の存在感が多少残っている。

### 5. 既存の動詞、形容詞、名詞などからの派生形

品詞の面から見ると、オノマトペは一般的には副詞として機能している。ここでは副詞以外の品詞の語から派生したオノマトペをあげる。どの語からの派生かが、複数想像されるものもあるが、一般的と思われるほうをあげた。

ここでのオノマトペの形態はA B A B型が最も多い。先にあげた日向・笹目表でも、1648 語中、A B A B型は419 語で全体の約 1/4 を占めている。大坪 (1989) によれば、収集した短歌の中に表れるオノマトペ285 語のうち、単純反復型 (A B A B型の他、A B C A B C型など) は160 語 (56.3%)、俳句からとった574 語のうちでは271 語 (47.2%) である (p.58)。したがって、以下においても単純反復

型が多くなっているのは当然である。

以下の43～50は動詞からの派生、43～49はイ形容詞、50はナ形容詞からの派生である。ここまではいずれもA B A Bの形態で、動詞の語頭から2音節をとり、繰り返している。

- 現代短歌・俳句に見る新語オノマトペ
- 43 鳥の目はまどかなれどもものいはずくいくいと見て見ぬふりをする (今村寿美)  
←食い入る
- 44 熱高き身のたゆたゆと息あえぐこの感覚を歌にせんかな (武川忠一)  
←たゆたう
- 45 何を着て何を拾はむ思ふともあなおぼおぼとこの老いし脈 (小市巳世司)  
←おぼめく (古語)、おぼろげな
- 46 おもおもと日を量りみる遅桜 (進藤一考)  
←重い
- 47 さびさびと瞳に浮かぶものの影豊原の街に帰り来たりぬ (土岐善麿)  
←さびしい
- 48 とほどほに波寄る浜は恋ほしくて風に流らふしぐれの雨は (柴生田稔)  
←遠い
- 49 新春の今朝たてまつる豊御酒のとよとよとありてまたたのたのと (北原白秋)  
←楽しい
- 50 早稲田がうぶうぶとしてそよぐとき童子歡呼のころわきたつ (坪野哲久)  
←うぶな
- 次の51はただ拍数を整えるためだと思うが、A B A B A Bの形と3回繰り返している。52はA B C A B Cなどの形態で動詞からの派生、53は古語、形容動詞からの派生、54～55と49'は名詞からの派生ととれる。
- 51 せいねんのつぺらぼうのづうたいがゆわゆわゆわとつどふ (時田則雄)  
←結わえる
- 52 白鳥のたゆたたゆたと帰りけり (辻桃子)  
←たゆたう
- 53 白菜やほがらほがらと鴉鳴き (中拓夫)  
←ほがらなり (古語)
- 一〇 54 一碗にはいく粒の飯があるのだらうつぶりつぶりと嘸みながら泣く (河野裕子)  
←粒
- 55 八手葉に雀衝撃して飛ぶや路地の翳りりりと寒けれ (坪野哲久)  
←凜凜たる (古語)
- 49' 新春の今朝たてまつる豊御酒のとよとよとありてまたたのたのと (北原白秋)  
←漢字「豊」

## 6. おわりに

以上、短詩を材料として、既存オノマトペなどをオリジナルに持つと考えられる新語オノマトペを見てきた。これらのオノマトペは、

- ①既存のオノマトペの音、形態を一部変えたもの
  - ②既存のオノマトペの音、形態は変えないが、他の点で新語と分類できるもの
  - ③オノマトペではない一般語彙を、オノマトペの形態に当てはめて作ったもの
- の3種類がある。

①の音の変化は、日本語母語話者が共通して潜在的に持つ音の持つイメージを利用している。オノマトペの音の交換は、ほとんどがまず語頭音で行われ、繰り返し形の時はA B A Bの2回の「A」で行われる。このことはオノマトペの語頭音が、語の意味と深く関わっていることを表す。形態を変化させる方は、繰り返し以外には、特殊音の添加・削除などによって行われることが多い。

②には既存のオノマトペの複合語化、または新しい分野に既存のオノマトペを借用するクロス・モーダルの手法がある。短詩という、非常に制限された定型の中でこの技法を用いると、新語オノマトペが新しい動詞と共起しているようでありながら、従来あるはずの動詞の存在も暗示していることがあり、わずかな拍数でより雄弁な内容を語るができる。

③は作者が何百というオノマトペを使いこなすうちに、自然に身についたオノマトペ生成パターンで、創成したものである。

新語といっても他者に理解できなければ意味がない。上記のいずれの方法も、斬新すぎず、また印象的な新語を造る上での有益な方法である。

### 註

- 1) 作歌作法上、たとえば格調を保つため、掛詞などがすでに旧仮名遣いを用いているため、字数（拍数）の節約になることがあるため、などがあげられる。
- 2) この「こしこし」を2.2で述べる音位転換と考え、「しこしこ」からの派生とすることも可能である。しかし、作者の表現意図を考えると、病気から快復した人がていねいに、しかし、力はそれほど出せずに体を洗う様子を表現しているとみられる。それで「ごしごし」の持つ力強さを軽減する目的で清音にしたと考え、ここに分類した。
- 3) 連続する二つの母音の一つにまとまる現象を指す。たとえば東京方言で「ウマイ」が「ウマー」、「シラナイ」が「シラナー」になること。
- 4) 窪蘭は音楽の「拍」との混同を避けるため、「モーラ」という用語を用いている。（窪蘭 2005 P.146）
- 5) 「夕日」葛原しげる（1886-1961）作詞。「ぎんぎんぎらぎら 夕日がしずむ ぎんぎんぎらぎら日が沈む（後略）」
- 6) 各種辞典によれば、「ぎんぎん」には以下のような解釈があるが、認識には年代の相違があると思われる。

「犬のほえる声の形容。（『学研国語大辞典』）」

「①はでで、きらびやかなようす。 ②むちゅうになつてはなやかにやるようす。

(『三省堂国語辞典』)」

「①虫などがうるさい音を立てて 鳴くさまを表す語。②頭中に強く響く音。また、頭が絶えず  
ひどく痛むさまを表す語 (『国語大辞典』)」。

## 〔参考文献〕

- 阿刀田稔子・星野和子 1993『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
- 飯塚書店編集部編 1999『短歌の技法 オノマトペ』飯塚書店
- 上野善道編 2004『音声・音韻』朝倉書店
- 大岡信 1999『日本詩歌読本』三修社
- 大野純子 2005「現代短歌・俳句に見る新語オノマトペーなぜ日本語母語話者には理解可能なのか」『日本学研究』第15期 北京日本学研究中心
- 大野純子 2007「マンガ『のだめカンタービレ』に見る新語オノマトペ」「21世紀における北東アジアの日本研究」国際シンポジウムにおける発表 北京日本学研究中心
- 芋坂直行 1999『感性のことばを研究する』新曜社
- 大坪併治 1989『擬声語の研究』明治書院
- 筧壽雄・田守育啓 1993『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房
- 角岡賢一 2007『日本語オノマトペ語彙における語彙的・音韻的体系性について』くろしお出版
- 金田一春彦他編 1998『学研国語大辞典』第2版 学習研究社
- 窪菌晴夫 2005『日本語の音声』岩波書店
- 見坊豪紀他編 1997『三省堂国語辞典』第4版 三省堂書店
- 斉藤夏風他 2001『名句に学ぶ俳句の骨法』下 角川書店
- 尚学図書編 1993『国語大辞典』新装版
- 玉村文郎 2000「有契化と無契化ー音象徴語の語形(その2)ー」『日本と中国ことばの梯』  
佐治圭三教授古稀記念論文集編集委員会 くろしお出版
- 田守育啓 1993「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」『言語』22-6 大修館書店
- 、2000「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴に関する実証的研究」『人文論集』  
神戸商科大学 vol.36-4
- 田守育啓・ローレンス・スコウラップ 1999『オノマトペー形態と意味』大修館書店
- 西原忠毅 1997『日本語の音感ー短歌を素材として』短歌新聞社
- 日向茂男 1990「擬音語・擬態語」『講座 日本語と日本語教育』7 明治書院
- 日向茂男 笹目実 1999「語形からみた擬音語・擬態語II」『東京学芸大学紀要2部門』50
- 水庭 進編 1993『現代俳句擬音・擬態語辞典』博友社

毛利正守・山口佳紀・高山倫明・湯沢質幸 2006 「字余り研究の射程」『日本語の研究』2 日本語学会  
湯沢質幸・松崎寛 2004 『音声・音韻探求法』朝倉書店  
『俳句』2001年8月号 角川書店 特集「オノマトペ（擬音語・擬態語）の研究」  
『歌壇』2004年6月号 本阿弥書店 特集「短歌におけるオノマトペの可能性」